

オススメ本コーナー



究員オスズメ本コーナーは、全17回をもちまして
となりますが、研究員6名中、最多の7回ご執筆
いただきました。

[illegible]

なぜ文字がそれほど大きな力を持ったのか、声で語られた教えは、語り手がいなくなれば消えてしまします。しかし文字になった言葉は、書いた人の身体を離れ、いつでも、どこでも、誰の前にも「生の声」として立ち現れる。読む人は經典の世界に入りこみ、そこで立ち出会う、仏弟子になる。大衆經典は、こうした大輪を起こす装置として、意識的に作られ、増やされ、書き直されていったのだと著者は説きます。意識的に作らるに本書は、この見方を現代にまで引き延ばします。仏教が口伝から写本へ、写本から印刷へ、そしてデジタルへと媒体を変えてきた歴史そのものが、仏教の歴史そのものです。語の言葉は、それを受けとる人によって、また変化するものであります。過去と現在の境目、そこには、仏教は生き続けているのだ。

「それは素朴で普遍的で、(書かれた言葉は、人に何を
「言」か) 仏教に関心のある方はもちろん、本や言葉の力につい
て、そうい方にも、深い示唆を与えてくれる一冊です。」

『宗教とエニリギズム』——大衆經典の展開と形成』(三浦匡憲館請求記号: 183.08-Sb51)

下田正弘 (著)

清华大学出版社

研究員オスメモータースは、6名の研究員と図書館員の交流も兼ねて2019年にスタートしました。2021年度の6年間に17回開催できましたが、研究員の協力の賜物です。誠にありがとうございました。最初「研究員の寄りたいものを三書館蔵書で所蔵している本や雑誌の紹介をしていただく」、とお話していましたが、次第に、公開講座を担当する研究員に「公開講座の内容を三書館蔵書で所蔵している本や雑誌を紹介していただく」コーナーに変わりました。これまでの紹介本を順次と、研究員の題のあるテーマが浮き彫りになります。「図・図・図」の表題順の展示ですが、研究員の題の見えるコーナー、手に取って読むことができる論文の作成に参画してきました。今回の第17回をもちえていよいよ「図・図・図」になります。改めてご愛顧いただきまして誠にありがとうございました。最後までどうぞ。

私のオススメ本

柴田泰山
(三康文化研究所研究員)

大蔵経を含め、仏教の経典は、お釈迦さまの教えを弟子たちが書きとめたものと、多くの方はそう思っているでしょう。ところが大乘仏教の経典は、釈尊の死後、何百年もたってから次々と生み出されました。誰が、どこで、なぜ書いたのか。この「仏教史最大の謎」に、まったく新しい角度から迫ったのが本書です。著者の下田正弘氏は、東京大学でインド仏教を研究し、大蔵経（仏典の集成）のデータベース化を主導してきた研究者です。本書では、フランスの哲学者デリダの「エクリチュール（書かれた言葉）」論を手がかりに、大乘経典を「歴史のなかの記録」としてではなく、「読む人の心のなかで働く言葉」として読み直します。

従来、大乘仏教は「まず新しい教団が生まれ、その人たちが経典を作った」と考えられてきました。しかし著者は、順序が逆だと言います。まず「文字で書かれた経典」が現れ、その経典を読み、伝える人々の輪から、あとになって教団や儀礼が生まれた、と。経典が仏教を動かしたのです。

なぜ文字がそれほど大きな力を持ったのか。声で語られた教えは、語り手がいなくなれば消えてしまいます。しかし文字になった言葉は、書いた人の身体を離れ、いつでも、どこでも、誰の前にも「仏の声」として立ち現れる。読む人は経典の世界に入りこみ、そこで仏と出会い、仏弟子になる。大乘経典は、こうした体験を起こす装置として、意識的に作られ、増やされ、書き直されていったのだと著者は説きます。

さらに本書は、この見方を現代にまで引き延ばします。仏典が口伝えから写本へ、写本から印刷へ、そしていまデジタルへと媒体を変えてきた歴史そのものが、仏教の歴史なのだと伝えています。師の言葉は、それを受けとる弟子がいてはじめて完成するものであります。過去と現在のあいだに人と人の場が生まれるところに、仏教は生き続けているのです。

専門書ですが、問いは素朴で普遍的です。「書かれた言葉は、人に何をもたらすのか」。仏教に関心のある方はもちろん、本や言葉の力について考えたい方にも、深い示唆を与えてくれる一冊です。